

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2025

「伸びやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第4回 11/7（金）13:30～15:00 報告

『まさしくここは子供の樂園』～外国人から見た日本人の子ども文化～

講師 アンドリュー デュアー（本学教授）

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

令和7年度第4回公開講座（受講者33名）が11月7日に本学図書館大セミナー室で開催されました。

江戸時代の鎖国が終わり、日本は初めて本格的に西洋に触れ始めました。世界では、各国は博覧会に力を入れ自国をPRしていました。1850年代のパリとロンドンで開催された博覧会には日本も出展していました。サムライ姿でパリの街を闊歩したりして、その容姿は日本への関心をとても高めました。

同時に、外国人が日本に滞在するようになると、文化の違いが外国人に多くの驚きと刺激を与えました。中でも、日本人の子ども観は、欧米とかなり違いました。大人と子どもの間にあまり距離がありませんでした。訪れる人は自分の子どものころを思い出しながら、日本の子どもをうらやましく思いました。

「まさしくここは子供の樂園だ。」

オールコック著「大君の都」（上巻、ページ152）

イザベラ・バードの目には、日本のお母さんとお父さんの子どもへの愛はほとんど「子ども崇拝」の域に達しているように見えました。（イザベラ・バード著「日本奥地旅行」、渡辺京二「逝きし世の面影」ページ326より引用）当時の欧米の上流社会や中産階級では、親は子どもの育ちを乳母に託して、教育を寄宿学校や女性家庭教師に任せていました。「こどもは人に見られるだけで、おしゃべりを聞かれるべきではない。」つまり、子どもは、社会的な立場から言えば必需品だが、おとなの前では話しかけられるまで口をきくべきではありません。ジェームス・M・バリー氏の「ピーターパン」やP・L・トラヴァースの著書「メアリー・ポピンズ」で子どもの扱いについて、親子の関係が薄いことが垣間見られます。子どもは社会的立場として必要な存在ではあるが、親の関心の的でもありませんでした。そして労働者の階級では、子どもは家庭手伝いをしたり、労働者としての収入源になったりすることは多かったです。6歳で子どもの域を抜けていました。

「イギリスでは近代教育のために子供から奪われつつあるひとつの美点を、日本の子供たちはもっているとわたしはいいたい。すなわち日本の子供たちは、自然の

子であり、かれらの年齢にふさわしい娯楽を十分に楽しみ、大人ぶることはない。」
オールコック著「大君の都」（下巻、ページ 226）

「イギリスの近代教育」というのは、生産的な国民を育てるための統一した産業モデルの公共教育のことです。個性より効率を重視していたことをオールコックは懸念していました。しかしそのころの日本の学校といえば、寺子屋でした。日本全国では 15,000～20,000 程あった寺子屋の江戸時代の就学率は 70～86%だったと考えられています。幕末の成人男性の識字率も 70%を超えていました。これらはすべて欧米の数字をはるかに超えていました。

「別の小屋では子供達が、穴から何等かの絵をのぞき込み、一人の老人がそれ等の絵の説明をしていた。ここでまた私は、日本が子供の天国であることを、くりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子供が親切に取扱われ、そして子供の為に深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子供達は朝から晩まで幸福であるらしい。彼等は朝早く学校へ行くか、家庭にいて両親を、その家の家内の仕事で手伝うか、父親と一緒に職業をしたり、店番をしたりする。」
モース著「日本その日その日」（下巻、ページ 68）

幕末と明治の初期に日本に滞在した欧米人は日本人の暮らしに驚くことが多かったです。たとえば、日本人は道で会った誰にでも陽気な、そして気さくな挨拶をしたこと。外国人にも。たとえば、夜の余暇を家を出て過ごしたこと。天気さえよければ、友だちや家族はぶらぶら散歩したり、星空や自然に目を向きながら交流をゆっくり楽しんだりしていました。屋外で過ごす日本人は子どもから大人まで虫の音や花の香り、鳥のさえずり、空の動きなど、回りの自然を繊細に鑑賞し、嗜んでいます。欧米人と対照的に見えました。日本人にとって、「今」が大切でした。そして、「ありのまま」で満足していた。これは産業革命の時代の欧米が忘れかけていた生き方でした。日本を訪れる欧米人は不思議に思ったが、同時に魅力的に感じ、高く評価しました。

「日本のおもちゃ屋は品数が豊富で、ニュールンベルクのおもちゃ屋にもひけをとらない。みな単純なおもちゃだが、どれもこれも巧みな発明が仕掛けてあって、大人でさえ何時間も楽しむことができる。」 「玩具を売っている店には感嘆した。たかが子供を楽しませるのに、どうしてこんなに知恵や創意工夫、美的感覚、知識を費やすのだろう、子供にはこういう小さな傑作を評価する能力もないのに、と思ったほどだ。聞いてみると答えはごく簡単だった。この国では、暇なときはみんな子供のように遊んで楽しむのだという。私は祖父、父、息子の三世代が風を揚げるのに夢中になっているのを見た。」

ヒューブナー著「オーストリア外交官の明治維新」より。(渡辺京二「逝きし世の面影」
ページ 340、341 引用)

モース氏も、日本の遊び玩具に惹かれて、おもちゃをたくさん集めました。

- ・鼠のからくり玩具 ・こま
- ・輪投げ遊び ・土メンコ
- ・貝遊び（おはじき） ・お人形
- ・縮緬細工 ・節句玩具
- など…

「日本ほど、子どもの喜ぶ物を売るおもちゃ屋や縁日の多い国はない。大きな町の通りにはクリスマスの靴下のようにぴかぴか光るおもちゃでいっぱいのお店がたくさん立ち並ぶばかりか、小さな町や村でも子どもの店の一つか二つかが必ずある。日本のどの町にも、子どもを楽しませて暮らしを立てている男女が何十人、場合によって何百人もいる。」

ウィリアム・グリフィス著 Ayrton, Matilda Chaplin, Child-Life in Japan and Japanese Child Stories (1901)に収録された “The Games and Sports of Japanese Children,” より

ところで、日本の文化の伝承者として知られているラフカディオ・ハーンが紹介する日本の歌の中には、道徳的なものも入っています。欧米人に理解でき、感心されると思ったのか？

実は、明治時代に入って間もなく、日本は欧米の学問や技術力にあこがれて、あらゆる面で見習う決心をしました。自分の文化で欧米らしくない部分を見直して、大事なものを捨てかけました。子どもの文化も。しかし、文化は文化。国民性はゆるぎないもの。子どもの文化と、日本人の子ども観は今日も健在であります。そして今日も、日本の子ども文化（おもちゃやゲーム、折り紙、絵本、昔ばなし、アニメ、文房具、模型、お菓子など）は大人の生活も彩っており、外国人をも魅了し続けています。

【講座の様子】

